

生物科同窓会には毎年40名近くの会員が新に加わっています。今期、会員数は2100名余りとなりましたが、この数は大学内に幾つかある学科別の同窓会の中ではベストスリー入るものです。この大きなネットワークを活かすことができるよう、今回も新しい情報と懐かしい情報を交えて紙面を製作しました。なお、今回も東京学芸大学全国同窓会「辟雍会」とのタイアップでニュースをお届けしています。

◆平成20年度生物科同窓会総会

本年も生物科同窓会の総会を、11月1日(土)の大学企画によるホームカミングデーに開催します。当日は学園祭である「小金井祭」の期間中です。昨年度に自然館の改修工事の半分の完成し、現在は残りの1/4を工事中です。今年の講演会と総会はリニューアルした自然館の教室で行います。ぜひ、旧友を誘って、新しくなった母校を訪れてみてください。

生物科同窓会「企画講演」のお知らせ

恒例の企画講演会を今年も同窓会総会に先立ちおこないます。本年の講演者は藻類を用いて細胞学を研究されてこられた石川依久子先生です。先生は97年に学芸大学を退官された後も、埼玉県和光市にある理化学研究所にて研究生活を続けておられます。なお、本講演会は一般公開ですので、生物科同窓会会員以外の方でも自由にご覧頂けます。

平成20年度生物科同窓会総会

日時:平成20年11月1日(土)

13:00~14:00 講演: 見えない世界がそこにある
—超高速ビデオとタイムラプスビデオ—
講師 石川依久子 先生

14:00~14:30 同窓会総会 議題:役員改選

場所:東京学芸大学自然科学系研究棟(自然館)
2階 生物学第1実験室(CN206室)

【石川先生からのメッセージ】私たちは一心に顕微鏡をのぞきこんでも、顕微鏡の視野を猛スピードで通り過ぎていく微小な生物には気がつきません。また、畑の作物を凝視しても、作物が枝葉を伸ばす様子は捉えることはできません。これは、私たちの脳が、限られた速度で動くものしか認識できないことによります。でも、私たちが認識できない生物の世界が、現実の身の回りには拡がっているのです。この講演では、最新の映像撮影器機を利用して、通常私たちが見ることのできない不思議な生物の世界を

紹介します。

◆同窓会員からのお便り

昨年の生物科同窓会総会で開催した、新任の岩元明敏先生の講演には約30数名が来場し、若さ溢れるフレッシュな話に耳を傾けていました。講演について、同窓生の菊池さとみさんに報告を寄せていただきました。

平成19年度東京学芸大学生物科同窓会 企画講演会 岩元明敏先生 —『植物の シュート構成』にふれる—

平成19年11月3日、生物科同窓会企画による岩元明敏先生の講演会が開催されました。講師の岩元先生は、4月から学芸大学に着任されました。

この日の講演のテーマは『植物はどのようにして枝分かれますのか?—植物のシュート構成を理解する—』でした。私は植物生理学の研究室に所属しているのですが、植物の形態については苦手意識を持っており、ややこしい内容ではないかと始めはやや気構えて講演を聞きました。しかし、先生は基本的な用語から一つ一つ丁寧に説明し、私にとって難しく感じていた先生の研究を非常に親しみやすく、わかりやすくお話を進めてくださいました。例えば、テーマの中心となる『シュート構成』という言葉。私はこれまで漠然と、『茎と葉』という意識しかありませんでした。先生はまず、この『シュート構成』とは『地上部の構造全般であり、枝分かれました部分も含む、色々と包括した呼び方』であることからお話を始めました。そして一枚の葉というのは一つの腋芽(葉の付け根にできる芽のこと)がついているものことであり、葉と腋芽で基本単位となる、ということ踏まえたうえでこのご講演の本題である『植物の枝分かれの仕組み』についてお話してくださいました。

先生の研究対象の一つであるミツマタは、三又分枝という特徴的なシュート構成を持っています。恥ずかしいことに、わたしはこの講演会で初めてミツマタという植物の存在を知りました。写真を拝見したところ、確かに先端が3つに分かれていて、三脚のような形をしています。先生方は表面構造の観察と、解剖学的観察によって分枝する茎頂の動態を解析したところ、ミツマタの三又分枝は腋芽に由来せず、茎頂分裂組織の分割によって形成されたものであることを明らかにされたそうです。この仕組みは被子植物では稀であり、被子植物の分枝システムが複雑で、柔軟性に富んだものであるという可能性を

示しているそうです。

先生のご講演の中で特に印象に残ったのは、ワカキノサクラのシュート構成についてのお話でした。多くの人が慣れ親しんでいるサクラ（その中でも特にソメイヨシノ）はなぜ美しいのか、ということに始まり、それはシュート構成に秘密があるという大変興味深い導入でした。普通の植物では花と葉は一緒に出てくるのですが、サクラに関しては先に花枝が成長し、その後に葉枝が出ることにより、人は花だけを楽しむことができ美しく感じる。先生の研究に使用されたワカキノサクラは全ての枝が花枝となり、その後その腋芽が発達する、もしくは前出葉の腋芽が展開するという、他のサクラとは異なるシュート構成をしています。その為、ワカキノサクラは冬芽において一番最初に形成された鱗片葉（前出葉の基部に形成された芽）が花期の終わり頃から急速に発達し、栄養枝をつくる、または花枝に普通葉を発達させるという方法で花期後成長していることがわかっています。先生方はこの特殊なシュート形成の過程をヤマザクラと比較しました。ヤマザクラの葉の形成は発生直後から葉身部（葉の主部）と托葉部（普通葉の葉柄の基部にある葉片）とに分かれているのに対し、ワカキノサクラでは発生直後、葉身部と托葉部の区別が明瞭ではなく、その後の発達もその他のサクラとは異なり、最終的な形態も鱗片

化したものから明らかに普通葉と認識されるものまでが連続的に観察されるそうです。そしてその中で、腋芽が冬芽として機能する普通葉が花枝上に出来た場合には前出葉の腋芽の展開は抑えられ、逆に冬芽の中の全ての葉原基が普通葉を展開させるための『境界線』に達することが出来ず、発達する腋芽を形成できなかった場合には前出葉の腋芽が展開して栄養成長を行うと考えられているそうです。私たちにとって馴染みのある花の一つであるサクラは、その種類によって花や葉の展開の仕組みは異なり、複雑なシステムで管理されているというお話でした。

この講演会を通じて自分の知識の浅さと、一つのテーマについて様々な見方をする大切さを感じました。この植物はこうだったが、この植物は違うかもしれない、ここがこう異なるから従来システムは当てはまらないのかもしれない、というように考えていくことは研究者として最も基本的な姿勢なのかもしれませんが、私にとってはつい忘れがちになってしまうことで、この講演会終了後、『私も研究室に入ったばかりの頃の気持ちを忘れずに頑張らなければ…。』と思いました。最後に、この場をお借りして岩元明敏先生並びに企画していただいた方々に御礼を申し上げます。

菊池さとみ 私立 淑徳小学校

(22期・中西研：平20年院修了)

◆生物科紙面同窓会

さまざまな時代に、さまざまな同窓生が生まれ、さまざまな人生を歩んでいます。近況、回想、思いなど・・・生物科同窓生の「今」の声をお届けします。

【1期】

●私は小（全）中（理社）の教諭を経験し、退職したがきつかった。金がかかっても早く義務教育の学校の姿を改善すべきだ。小学校教師を今の中学校教諭の姿にし、1人の児童を多数で指導する。中学教師は今の高校教諭の姿にし、生物のみを指導すれば生徒は多くの先生に接し、学習するので学力は伸びる。小中校は教諭が増え、十分ゆとりができ義務教育は充実する。そして、学大には優れた学生が集まり、国も富むと思う。(N. I. 昭和28年卒)

●只今、「信州きのこの会」と、「日本食虫植物同好会（JCPS）」に属しております。食虫植物の自生地の探索を楽しみにしております。生き易い所でご存知の所があれば教えて頂きたいと存じます。又、毒草も興味がございます。カエンタケ等、まだ見た事がないものを是非購入したいと存じます。よろしく！南米のスペイン語の新聞に出ておりましたが、簡単に採りに行けないので！（K. I. 昭和28年卒）

●三月末日で十年間勤めた幼稚園長の職を辞した。こうなると毎日の過ごし方が難しい。今のところ、

散歩が日課だ。コースは野火止用水沿いの遊歩道である。春にはカルガモの親子連れに出会うのが楽しみだった。七羽の子ガモは無事に巣立ったらしい。八月初め、見慣れない蝶を見る。図鑑によるとアカホシゴマダラで、来年は奄美大島あたりが生息地らしい。温暖化の証との出会いだった。(S. N. : 昭和28年卒)

●古谷庫造先生のご逝去に接し、心からご冥福をお祈りいたします。先生からは特に科学教育の大切さをご指導いただきました。「教えるということは、たとえ相手が子どもでも、ごまかしがあってはならない」と。そのためにも私は小手先の指導力に屈することなく、研究者としての道を心して歩いてまいりました。卒業後も先生の研究室を訪れ、多くを学ばせていただきました。今感謝の気持ちで一杯です。合掌。(S. K. : 昭和28年卒)

【5期】

●学大を卒業して早くも50年経った。新制大学の5期、まだ何も整っていない頃の大学。木造平屋建ての校舎は、元兵舎でそれも厩舎とか。身の丈ほどの草の繁ったキャンパス。昼休みはその中に埋もれるようにして昼寝したりもした。チョークと黒板だけの授業。実習では夜までよく残ってがんばった。バスもない真っ暗な砂利道を小金井駅まで歩いた。今は全くその面影も無い。思えば懐かしいなあ。今は、電子顕微鏡で生物の微細構造を調べて楽しんでいま

す。(T. U. : 昭和 32 年卒)

●二番目の孫の誕生を期に教職を退き、それ以来、娘の手助けをしながら、手足頭共に使えるようにと手編み（自分の着る物は殆ど娘姉妹孫達のもの）、ウオーキング（国の内外、山も含めて植物観察も兼ねて、早池峰山で早池峰ウスユキソウ、屋久島で屋久杉、スイスの牧場で野生のクロッカス、オーストリアのシャーレックで咲き誇る数々の高山植物等々）、点字学習（本の点訳、視覚障害者との交流、小中高校への点字指導）をして来ました。最近では体力が落ちたのでプール通いを多くし、庭に一年中、花を咲かせ、野菜を育て、果物も実らせようと庭の手入れに励んでいます。今、庭の一角の古代蓮の桶にメダカが育ち、窓辺のゴーヤと朝顔の緑のカーテンが暑さを防いでくれています。(K. K. : 昭和 32 年卒)

●私共、昭和 28 年に一部甲類理科に入学した第 5 期の同級会を今年 5 月 8 日に青山において開催しました。23 名出席の中に生物科の同級生が 4 名おり、皆定年後の人生を未だかくしゃくとして送っていました。私共の頃には、下田や真鶴にある他大学の実験所を使わせてもらって臨海実習合宿をしました。当時のことを皆なつかしく思い出して語らいながら、生物科の活躍と発展を念じました。(K.K. : 昭和 32 年卒)

【13期】

●小さいときからの教師志望で学芸大に入りました。指導教官は井上巖先生でした。昨年先生が亡くなる前、ケアハウスを訪問し、談笑したのが何よりの救いです。私は家庭教師として渡米 (N.Y.) 二年休学、卒業後結婚。時々、中学校で英語と理科を指導出来たことが何より楽しい思い出です。夫と息子二人に全力投球で尽くしてきた私は今、ペタンク球技と歌う会（童話）で楽しんでおります。同窓会をぜひして欲しいと思います。(E. A. : 昭和 40 年卒)

●昨年 3 月に私学東京女子学園を定年退職しました。在職中は大学の井上研によくお世話になり、協力もいただき感謝しております。植物観察のため登山を、水中生物観察のためダイビングを、スキー部の顧問でスキーを長い間させてもらいました。私学の行事でホームステイなども 7 週間も経験したり、夏休みに海外にも行けました。私学にもいいところがありました。今は、ぼけ帽の水墨が、プール、ヨガ、wii フィットなど楽しんでます。中断している研究も続けるつもりです。(T. N. : 昭和 40 年卒)

【21期】

●大量退職時代を迎え、本校でも新採が 5 人います。理科を専門に学んだ教員が少ないのが悩みです。今年の学大の実習生は、理科専攻でした。うれしかっ

たです。学大の理科の学生がたくさん教員になって、理科が好きな子どもたちを育てて欲しいと願っています。来年度は、全国小学校理科研究会が東京で開かれます。卒業したら、東京都小学校理科研究会で学んで欲しいと待っています。(H. E. : 昭和 48 年卒)

【25期】

●本年度より、練馬区立光が丘第二小学校の校長として勤務しております。本校は、平成 22 年度より光一小と統合され、新校を立ち上げます。新指導要領移行、統廃合、校内研究発表会の準備に追われる毎日です。今年は、校庭に緑のカーテンが設置されました。校舎から 6 メートル離してプランターを置き、屋上までネットが張ってあります。この夏、子どもたちは緑のトンネルの下をくぐり、プールやサマースクールに登校しています。(E.S. : 昭和 52 年卒)

●転勤して生物科の先輩がいる。なんとなく、安心します。若い世代が私達を押し上げています。もう少し教室と子ども達と過ごしたいです。

世界も変化し、教育会も様変わり。自分も年を重ね、生きている。私のミッションは、ひまわりのように温かいエネルギーを出して生きるです。最後まで、楽しく人とつながっていきたいです。(K.T. : 昭和 52 年卒)

【29期】

研究室で実験をし、白衣のまま生協の食堂で昼食をとる・・・そんな毎日が大変懐かしく思い出されます。現在都立八王子北高校で生物を教えています。この学校も 17 年目になり、来年度はたぶん異動です。大学時代も含めスポーツばかりの生活でしたが、年々仕事量が増え、体を動かす機会が減ってしまったのが、残念です。最近、学大生物科関係者と会う機会が増えてきました。今後ともよろしく願います。(T. K. : 昭和 56 年卒)

【37期】

●皆様御無沙汰しております。お元気でお過ごしでしょうか。昨年 4 月より、ジャパンエナジー精製技術センターにて、微量窒素、硫黄分析の仕事させてもらっています。研究職は永年の夢だったので、毎日楽しくやっています。また、就きに六回家庭教師として小六の男子の補習も担当しています。

これで一生のうちにやってみたい仕事は、残すところファーストレディー・・・!? (S.K. : 平成元年卒)

【45期】

●現在、味の素（株）で植物の研究に従事しております。学芸大での研究の経験が活かされた業務であり、お世話になった先生方や仲間に感謝しています。(D. I. : 平成 9 年卒)

【49期】

●教員になって 8 年目。今年度は初めての異動を体験し、新鮮な気持ちで子どもたちと毎日、過ごしております。また、今年度は、仕事の他に育児が加わり、今までとは違った環境の中で生活しています。この夏は、カブト虫の世話をしたり、戦隊もののショーを見に行ったりと家族での時間をたっぷりとりました。(K. O.:平成 13 年卒)

●現在、私は聖望学園高校科学部の顧問をしています。部活では、マイコンロボットにはまっています。電子ロボと遊ぶアイデアコンテストや ET ロボコンといった自律型ロボットの大会に参加しています。思い通りになかなか動いてくれないおもちゃみたい

なもので、生徒達と楽しんで作っています。また、部活で行った桜の調査がニュートンの 5 月号で紹介されましたのでよかったです。 (Y. N.)

【53期】

皆様、ご無沙汰しております。私は、昨年五月に結婚をし、新生活を東京の綾瀬にてスタートしました。卒業後に就職した会社で現在も働いており、最近やっと仕事と家事のバランスがとれてきたかなど、という感じがしています。毎日があっという間と感じる日々を過ごしていますが、まだまだ目標がありますので楽しんでいきたいと思っております。近いうちに学校の方へ遊びに行きたいと思っています。(A. Y.:平成 17 年卒)

◆追悼文

この一年間で昔の卒業生には懐かしい、お二方の先生がこの世を去られました。井上巖先生、古谷庫造先生…共に東京学芸大学の黎明期から活躍され、生物分野の基礎を築いてこられました。本号では両先生の下で学ばれた横山正さんと岡崎恵視さんに追悼文を綴って頂きました。

故井上巖先生を偲んで

横山 正 (財)豊島修練会理事 (17期・昭44卒)



東京学芸大学名誉教授 井上巖 (いのうえ いわお) 先生は 2007 年 (平成 19) 9 月 28 日、91 歳の天寿を全うされました。

井上先生は 1916 年 (大正 5) 3 月、東京の深川にお生まれになりました。1937 年 (昭和 12) に東京高等師範学校理科第三部 (生物学) を

卒業された後、東京文理科大学生物学科 (動物学) に入学され、1940 年 3 月同学を卒業されてから、秋田師範学校教諭として赴任されましたが、その年の 12 月には兵役に服され、それから 4 年 6 ヶ月のあいだ、現役兵として中国大陸を転戦されました。戦後復員されてから、東京都立第三中学校教諭として 1948 年 (昭和 23) 3 月までお勤めになられ、同年 4 月、大学に移行直前の東京第三師範学校助教授に就任され、その後 1979 年 (昭和 54) の定年まで 31 年間、ライフワークであるハリガネムシの研究と、学生・院生の指導にあたられました。その間、1960 年 (昭和 35) 8 月に北海道大学から農学博士の称号を取得されています。1966 年 (昭和 41) からは大

学院研究科も担当されるようになり、1968 年 (昭和 43) に教授に昇進されました。1979 年 (昭和 54) 東京学芸大学を定年退官後は、文京女子短期大学の施設準備に関わられ、1982 年 (昭和 57) の短大発足と同時に保育科長になられ、1991 年 3 月まで学生の指導にあたられました。1989 年 (平成元) には勲三等旭日中綬章を叙勲されています。

井上先生のご研究はハリガネムシについてですが、それは、東京文理科大学ご入学と同時に、恩師である福井玉夫博士から与えられた卒業論文のテーマだったそうです。当時の日本にはこの動物群の専門の研究者がおらず、全くといっていいほど未開拓の分野で、外国の文献集めから始めなければならない研究でしたが、2 年生になって福井先生が突然退官されるというアクシデントに見舞われました。しかし井上先生はテーマを変えることなく、それから独力で研究を続けられました。その卒業論文は高い評価を得たと伺っています。論文の前半は欧米における研究の歴史を概説したもので、それを受けて当時の日本のハリガネムシにつけられた種名が誤りであることや、その何れもが新種であると思われることを述べ、後半では、当時、外国の論文でも断片的にしか報告されていなかった幼虫の生態や形態を、かなり詳しく記載したものでした。もしも、大学卒業後の兵役と戦後の混乱期の空白を加えた、約 10 年間の研究の中断がなければ、もっと多くの業績を残されたのではないかと惜しまれてなりません。

井上先生のハリガネムシについての研究は、大きく三つの分野に分かれます。ひとつはそれまではつきりわからなかった、日本産のハリガネムシの戸籍作りですが、井上先生の研究によって、はじめて国内のハリガネムシの分類学上の位置づけが明確となりました。この分類学上の仕事については、昭和天皇も関心を示されていたようで、侍従を通じて、ご自身の「小笠原産のヒドロゾア類」に関する論文を、たびたび井上先生のもとにお送りくださったそうです。これに感激した井上先生が、天皇陛下のご研究について「天皇陛下の御著書」と題する文を文京短期大学の紀要に投稿され、その別刷りを、担当の侍

従を通じて陛下にお送りしたところ、陛下がお喜びになったことや、ゆっくり読みたいから文庫に持ち帰る旨のお言葉があった由のお便りが、担当の侍従から先生にあったそうです。普段あまり自慢話などしない先生でしたが、このことはさすがにうれしかったのか、照れながらも、笑顔でそのことを我々に話してくださいました。

研究の第二の分野は組織学的手法を用いてハリガネムシの体内構造を明らかにすることでした。これも地道な努力によって詳細な図が完成し、体表直下に感覚器官の一種を発見するという、海外から注目される収穫もありました。また、研究の第三は主に生態関係のもので、水中での交尾・産卵から卵の発生経過、幼虫の微細構造、宿主への侵入方法、宿主体内での成長経過など多岐に渡るものです。多くのことが先生の研究によって明らかとなりましたが、まだ未解明の部分も残されています。

井上先生はいつも温厚で笑顔を絶やさず、その誠実なお人柄には定評がありましたが、勉強や研究には厳しい姿勢をお持ちで、ご自身の講義についても、講義前には必ず明け方起きて講義録に目を通し、何か一つは新しい内容を盛りこむよう努力されていたそうです。研究室の院生や学生は随分鍛えられましたが、おかげで井上研の卒業生は、現在、各界で活躍しています。私は大学入学と同時に指導教官として井上先生の教えを受けることになりましたが、3年生からは研究室に入れていただき、その後の2年間と大学院の2年間、計6年間先生の教えを受ける幸運に恵まれました。その後も就職先が同じキャンパス内の附属小金井小だったため、たびたび研究室を訪れては、公私共に、いろいろな面でご指導をいただきました。今改めて天国の先生にお礼申し上げますとともに、安らかなご冥福をお祈り致します。

故古谷庫造先生を偲んで

岡崎 恵視 東京学芸大学名誉教授(13期・昭40卒)

東京学芸大学名誉教授 古谷庫造(ふるや くらぞう)先生は、2007年(平成19)12月27日未明、心不全のため、東京都小平市のご自宅においてご逝去されました(享年85歳)。特にご病氣も無く、本当に突然のご逝去でした。

古谷先生は1922年(大正11)に茨城県筑波郡でお生まれになり、1943年(昭和18)に東京第一師範学校をご卒業後、1944年(昭和19)に軍隊に入隊され、終戦を迎えられました。1947年(昭和22)に東京文理大学生物学科(植物学専攻)に入学され、植物生理・生化学を学ばれ、海藻を材料にして研究されました。1950年(昭和25)に同大学を卒業され、翌年に東京学芸大学助手になられ、1986年(昭和61)のご定年まで、36年間の永きにわたり、東京学芸大学に在職され、教育と研究に取り組みされました。その間、1962年(昭和37)には東京文理科



大学から理学博士の称号を取得されました。1964年(昭和39)に助教授、1973年(昭和48)に教授に昇進され、その後、附属世田谷中学校校長、学部主事(第3部部長)を務められました。また学外では、全国国立大学附属学校園長会会長、日本理科教育学会副会長、文部省大学設

置審議会専門委員等の要職を歴任されました。日本生物教育学会においては、副会長を1984年(昭和59.4)～1988年(昭和63.3)(事務局:東京学芸大学)まで務められました。1986年(昭和61)に東京学芸大学を定年でご退職、その年に創価大学教授に就任され、1993年(平成5)まで在職されました。そして、1998年(平成10)には勲三等瑞宝章を叙勲されました(上のお写真)。

古谷先生のご研究は生物学(植物生理・生化学分野)と理科教育・生物教育の2分野にわたります。生物学分野では、三輪知雄先生(後の筑波大学初代学長)のもとで、海藻類の炭酸カルシウム形成(石灰化)機構を研究されました。現在注目されている「バイオミネラリゼーション(生体鉱物形成)」研究の藻類における草分けでありました。

理科教育・生物教育分野でのご研究は、1969年(昭和44)年に生物学科から理科教育学科へ移籍された後に精力的に行われました。大学及び附属学校の教員を結集した理科教育プロジェクト研究として、「物質及びエネルギー交代を中心にした中学校生物領域の系統指導について」(1972)などがあります。また、多くの共同研究者と共に“プロダクトメータ”を使った光合成や呼吸に関する実験教材を開発されました。1978年には「理科における環境教育」(著・編)(明治図書)を出版されました。学校における環境教育の必要性をいち早く見抜かれたことには敬服いたします。1990年(平成2年)には(財)日本教育研究連合会から「理科教育のカリキュラムの研究・環境教育の研究」で表彰されました。

私が古谷先生と初めてお会いしたのは、大学3年次に卒業研究のため研究室に入れていただいた時でした。1963年当時、先生は新しい生物学である生物化学を専門にしておられ、白衣の大変お似合いの新進気鋭の専任講師でした。炭酸カルシウムを形成する「石灰藻」を研究されておられ、大変人気のある研究室でした。先生は教え子の面倒を大変良く見てくださり、先生のお世話になった先輩や後輩は数え切れません。私もその一人で、東京教育大学の大学院を修了して本学に職を得たのも先生のご尽力によるものでした。先生は表・裏の無いご性格で、また

自分の欠点などをむしろ自分からお話になり、相手に全く警戒心を抱かせられませんでした。私はこれを先生の「八方破れの構え」と呼んでいるのですが、なかなか真似ができるものではなく、先生にはそれだけ自信があったのだと思います。例えば、ご出身の茨城県水海道の方言丸出しで、「駅」を「いき」、「茨城」を「えばらぎ」と発音されており、皆が時々戸惑いました。そのお人柄から、恩師の三輪知雄先生に愛され、また目上の同僚教授からは、親愛の情をこめて「古谷こぞう」（庫造の発音を小僧ともじって）と呼ばれたりされておられました。日本の海藻研究の第一人者の千原光雄先生（元東京教育大教授、筑波大学教授、千葉県立中央博物館館長）とは無二の親友でした。第3部部長当時は、ストレスが

多かったためか、いつも沢山の薬をお持ちで、薬を「飲む」というより「食べる」といった表現がピッタリでした。しかし、天賦の管理能力をお持ちのようでした。また、本学の「理科教育」の重要さをいち早く主張され、ご恩師の三輪知雄先生の勧めもあり、自ら生物学科から理科教育学科へ移籍され、現在の理科教育学科の基礎を作られました。

私が先生に最後にお会いしたのは、昨年（2007年）3月の私の最終講義、退職パーティーにご出席いただいた時でした。そして今年の正月に退職のご挨拶に伺いたいとお電話したのが、先生のお声をお聞きした最後になりました。今は悲しみに耐え、ただただ先生のご冥福をお祈りするばかりです。

◆キャンパス内自然観察会

若い人達の自然体験が乏しいといわれ久しくなりますが、生物科同窓会では昨年同様、本年も在生学生と同窓生を対象に、学芸大学構内にて動・植物の自然観察会を5月14日（水）に行いました。昨年。土曜日に実施したところ、学生の集まりが芳しくなかったため、今年は学生が大学へ来る平日に実施しました。講師はベテランのナチュラリストである北野日出男氏、遠藤純夫氏・青木良氏の3名。

あいにく、この日の午前中、嵐のような雨が降りました。開始時刻の2時半にはすっかり雨も風も収まったのですが、午前中の様子を見てか、またも集まった学生はわずか。同窓生と教員を合わせて10名程のこぢんまりとした観察会となりました。それでも噴水池の中に潜むハナアブの幼虫を観察したり、自然館付近の植物を観察することができ、参加者は有意義な一時を過ごしました。来年の観察会は、晴れることを一同願っています。

◆大学での出来事

人事に関して移動がありました。中西先生が生命科学分野から理科教育学分野に移動されました。益々のご活躍が期待されます。後任には Ferjani Ali（フェルジャーニ・アリ）さんが9月1日付けで助教として着任されました。Aliさんはチュニジア出身で、4ヶ国語を自在に話す気鋭の研究者です。専門は植物生理学で植物の形態形成などの専門家です。

さて、自然館の耐震補強工事の進行具合ですが、北西部の第2期工事が終了し、1階に飯田研、岩元研が2階に三田研、真山研が、3階（理科教育学分野）に中西研が移りました。9月から残りの東側部分の第3期工事が始まりました。そのため東側住人であった狩野研、高森研、吉野研の一部が今現在自

然館の他の部屋に仮住まいを強いられています。来年3月には工事完了予定です。自然館の玄関前も様相が一変すると思います。これを機会に是非一度母校をお訪ねください。

◆卒業論文発表会・修士論文審査会（公開）のお知らせ

平成20年度の卒業論文発表会は2009年2月7日（土）、8日（日）を予定しています。後輩の研究成果を是非ご覧になってください。また、2月12日（木）には修士論文審査会を行います。公開審査ですので、発表はどなたでも見ることができます。卒業論文発表会、および修士論文審査会の日程を含めた詳細は、来年1月に生物科同窓会のホームページでお知らせいたします。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~biology/seibutsuka/dosokai.htm>

◆会費納入等のごお願い

平成21年度～24年度の会費を集めます。同封の郵便振替用紙にて2500円をご送金ください。

口座番号：00170-1-21830

加入者名：学芸大生物科同窓会

なお住所変更の際には、下記までご一報ください。

電話/FAX 042-329-7521（庶務：吉野）

E-mail: mayama@u-gakugei.ac.jp（会計：真山）

今回の紙面同窓会では、平成20年度までの会費を納めていただいた1, 5, 9, 13, 17, 21, 25, 29, 33, 37, 41, 45, 49, 53期の皆さまに原稿依頼のはがきを送りました。来年は2, 6, 10, 14, 18, 22, 26, 30, 34, 38, 42, 46, 50, 54期の皆さまに原稿を依頼する予定です。たくさんの方をお待ちしております。